

持続可能な生き方を築くための日本語教育： 岡崎敏雄（2009）『言語生態学と言語教育— 人間の存在を支えるものとしての言語—』

鈴木(清水) 寿子*・張 瑜珊・半原 芳子・房 賢嬉・平野 美恵子

*著者5名が平等且つ協働的に本稿を貢献していた。表記はあいうえお順である。

0. 書誌情報

岡崎敏雄(2009)『言語生態学と言語教育—人間の存在を支えるものとしての言語—』凡人社、3200円、全263頁、ISBN978-4-89358-728-2。

1. はじめに

「生態学」とは、自然科学と人間科学を包摂する総合的な学である。本書のタイトルにもある言語生態学は、生態学の中でも、言語生態系、人間生態系、自然生態系の間の一トータルエコロジーを捉え、その保全・育成を目指す学とされる。

グローバル化の進展する現代にあつて、人間の生き様は大きく姿を変えた。岡崎氏は、非正規労働者の急拡大や農業の工業化の加速から、雇用や食糧のシステムが大きく揺らいでいる事実に着目しつつ、「10億の人の生存が脅かされている」現状を、一人ひとりの状況の一トータルであると警鐘を鳴らす。生きる基盤が脆弱化する中、いかに我々の持続可能な生を形作っていけるかという問に向き合い、岡崎氏は生態学的リテラシー（本書4章に詳述）の育成を主軸とした言語教育に希望を見出している。本書は、いわゆる日本語習得を目指した「ツールとしての言語教育」の脱却を目指し、「内容重視の言語教育」への道標であるとともに、対話的問題提起型学習（岡崎・西川 1993）や、外国人年少者の日本語教育を展開してきた岡崎氏による、その思想的水脈の展開された一冊である。各章の冒頭に配された、アメリカ先住民、インドの農民、陶淵明らの詩および岡崎氏による解釈が味わい深い。言語・自然・人間の関係を問い直す言語生態学の世界に、読者は自然にいざなわれてゆく。

2. 本の構成

本の書立ては以下のものである。

- ・はじめに
- ・第1章 言語生態学とは何か
- ・第2章 想像力の縮退の下にある言語生態
- ・第3章 言語生態学と言語教育
- ・第4章 生態学的リテラシーの育成をめぐる課題と方法
- ・第5章 生態学的リテラシーの育成
- ・おわりに —自然史を負うものとしての問い—

3. 各章の紹介

3-1 はじめに

「はじめに」では、雇用・食糧、そして言語が人の生存を支えるものとして存在していないことを見据え、「なぜなのか」「何をなすべきか」「人は何であり、何であるべきか」の問いを発していく。

生態学では、言語の状態がよい状態にあるのは言語活動の起こる人間活動がよい状態にあるからだという考え方の基礎に立つ。また、生物・人間・コト・モノのつながり全体に着目する。問題があるときに、個体の中に原因を見ず、関係のあり方の問題点を中心に特定するスタンスを取る「問いのつながりの学」であるなど、生態学での世界観が提示される。

3-2 第1章 言語生態学とは何か

本章は言語生態学の学の骨子について、まず「定義」、「対象とする領域」、「目的」、「学の性格規定」から紹介される。言語生態学は Haugen(1972)によって定立され、「言語生態学はある所与の言語とそれを取り巻く環境との間の相互交渉的関係の学である」(ibid:325)と定義付けられた。「関係の学」

であるゆえに、「言語の」生態学は、言語のみではなく「人間」も不可欠な関係にあるという。つまり、言語生態学では対象とする領域には、個人の精神(mind)中の「心理的生態領域(言語と他の言語との相互交渉的関係の領域)」と、個人対社会の間の「社会的生態領域(言語と社会との間の相互交渉的関係の領域)」がある。さらに、心理的・社会的両領域の相互交渉的関係も対象の領域の一つになる¹。

次に、言語生態学の目的については、「言語生態」と「言語生態と環境」との間の関係²を(1)記述・分析をし、(2)保全・育成にあたり、(3)人間の生態学として形成・展開することである(p.5)とされる。最後に、言語生態学の学性格規定としては、(1)関係の学、(2)(言語の)保全の学、(3)人間の生態学としての言語生態学、という性格が特徴づけられている。

上記の概念を理解した上で、次に、岡崎氏は言語生態学の原理的展開とされている“言語保持(言語的多様性の基盤)”の理論について紹介する。言語がどのように保持されるのか、あるいは喪失されるのかに関する説は、1980年代以前に、経済的合理主義に基づいて選択されるという捉え方をされてきた。その後、話者がなりたいたい自分という「言語とアイデンティティーの追求」に起因すると捉え、また、民族グループのアイデンティティーにも関連しているという³。さらに、「言語シフト・保持理論(Language shift/ Maintenance theory)」が紹介され、人口動態、社会、政策、文化、言語そのものなど多数の要因群が言語シフトと保持に影響するという。したがって、言語シフトの要因が特定できれば、その傾向を反転することによって言語が保持できるという理論も現れた⁴。言語を長期間にわたって保持していくための支援システムを探求するのに、Peter Mühlhäusler⁵は上記の諸理論の視点の継承し、統括的な「生態学的理論(Ecological theory)」という枠組みを提唱した。いわゆる、「ある言語の保持を目指すには、他の言語の保持・育成が必要」(p.11)であり、それに連環した言語外要因を配慮しなければならない。それを通して生態的支援システムの保全ができ、言語生態系の自律的保持が実現できるといふ。

章の最後に、岡崎氏は人間の生態(=言語の生態)の記述・分析をし、言語の保全・育成をなす政策の実現について具体像を紹介する。「言語の生態の福

祉(wellbeing ; あり方のよさ)の状況は言語話者の生態の福祉の状況に直結する。すなわち、言語は人の生活の質(quality of life)に直結する」(p.12)という立場から出発し、岡崎氏は最初に日本における海外出身の年少者を例として取り上げ、彼らの生活実態は言語の状況を左右すると紹介する。そして、国の労働/住宅/社会援助など別個の政策は、話者の生態・福祉に影響を与え、この話者の生態・福祉はまた言語の生態・福祉を左右すると述べる。つまり「政策→話者の生態→話者の言語生態」という関係が成立していることから、言語生態・福祉を保全・育成するためには、別個の政策ではなく、生態学的政策連環を配慮しなければならないと示唆している。

3-3 第2章 想像力の縮退の下にある言語生態

第2章では、グローバル化の変動の下にある世界の急激な変動により、世界について考える基盤が乏しくなっていること、それに伴い想像力が縮退していること、そして想像力の回復のために何が必要かについて言語生態学的な視点から述べている。

グローバル化の下での人間の諸活動は、環境や自然生態系レベルにも影響を及ぼし、多くの生物種が危機に瀕している。このような危機的状況の中で、人間の生きていく上での展望や予測が立たなくなる、いわゆる「生きるためのスキーマの崩壊」の状態になる。それによって想像力は乏しくなり、その結果、言語が十分機能しなくなる。

想像力をことば・人間・自然という三者の間のつながりが十分生きたつながりとして働いているかの点から見ると、次の2つの状態が考えられる。まず、想像力に及ぼす諸関係がよい状況では、ことば・人間・自然のつながりが良好で、ことばが想像力を伴って機能している。一方でよくない状態では、内実を伴った関係が見えず、さらにその関係を言語化できないといった想像力の縮退に陥る。このような生態では想像力の縮退による「ことばの形骸化」が進み、自分の生活経験の範囲内でしかことばの解釈ができず、想像力を働かせて自分の生きている世界について解釈することができなくなる。さらに、人間同士がおかれている境遇において理解のための共有のネットワークが違いすぎると「ことばの融解」の状態になり、ことばはまったく意味をなさなくなる。

例えば、「雇用」ということばは、従来は終身雇用といった家族全体の人生を支えることが保障され

ることばであったのが、今ではその内実を失いつつある。ことばの内実が失われたことにより、人と人との間のことばの内実のずれを招く。お互いの間のつながりも変質するがそれに気づかず、今までの信頼が内実を失い、世界そのものや自分の生き方も見えなくなる。このようにことばが十分に機能しないという言語生態は、世界観、行動基準、他者との人間関係、自己のアイデンティティーに影響を与える。

想像力の縮退した事態の下で、生活し、ことばを使うこと(言語生態がよくない状態、言語生態における貧困)、ことばに内実が伴わない状況(ことばの形骸化・融解)の原因とその改善は一つではなく、つながりの中で捉えることができると言語生態学では考える。その上で、言語生態のよい状態を保全・育成する具体策として4つ挙げている。①コト・モノ・人のつながりを、自分を起点として紡ぎ合わせ、そこに浮かび上がってくる相互依存の広がりをとらえていく、②その下でどのような生き方を模索するかを様々な糸口、世界の中で人の生き方への問いの下に、人の生存のありようの群像をつないでいく、③その下で示される人の群像を基礎とした人とのつながりをどのように持っていかを探る、④それらを統合してどのような自己の像を形作っていくかを考える、ということである。これらを通して、想像力を、言語生態系・人間生態系・自然生態系の間をつなぐものとして甦らせていくことを追求する。

「言語のあり方のよさ」を保全・育成することは、「人の生き方のあり方のよさ」及び「自然のあり方のよさ」の保全・育成につながり、そのことは人間生態上の課題、即ち持続的な生き方を考える過程をたどりながら、言語の生態の内実を豊かに回復していくことである。

3-4 第3章 言語生態学と言語教育

第3章は、グローバル化による社会の構造的変動、すなわち国際競争に伴う雇用の流動化と、そうした雇用のあり方の転換によって引き起こされる就職、結婚、子育てなどのライフコースの確定性の低下を前提とした上で、変動に関わる諸問題を自己の問題として捉え、さらにはその変動の下でどう生を追求するかという「持続可能な生き方」を探るための言語教育を提言する。この言語教育は、例えば環境問題について考える際に、様々な専門分野での議論を考慮に入れ、それらをつなぐネットワークの要として機能するのである。

持続可能性教育の展望として、まず国際的競争の激化を背景に即戦力養成を目指して専門化・細分化された高等教育に対抗する「アクロス・カリキュラム」の形成を挙げている。自然科学、人文社会科学などの専門分野を横断し、各分野の結節部分を形成するネットワークの要となる教育が、グローバル社会の下で生き抜くために不可欠な多様な能力と多角的な見方を養う。そして専門分野横断に加え、雇いを軸としたライフコースが親の世代の頃のように予測できなくなっていることから、ライフコースの各段階を視野に入れた「アクロス・タイム・カリキュラム」も必要であるとする。これは、世界のありようを確認・予測しながら、各ライフステージでの自己の考え方や意思決定の仕方を修正、または新たに形成し、ライフコースをメタ的に教育・学習することを可能にする。

即戦力重視の高等教育では、「自分とは何か」という問いを考える暇がなく、自己を基軸とした世界とのつながりはセマイままで、不確実なライフコースを歩むことは困難となる。持続可能性教育は、グローバル化の変動の下で、雇用と食糧の問題が世界の隅々で起こり、誰もが貧困を身近なことと感じているこの現実を「自分を起点」として捉え、「世界はどうなっているのか」「自分とは何なのか」を分野と時間を横断した広いつながりの中で問うていく。こうした人の生存を支えることばの学、すなわち言語生態を保全・育成する持続可能性教育としての言語教育が、次章の焦点である。

3-5 第4章 生態学的リテラシーの育成をめぐる課題と方法

本章では、第2章で見たことばの「形骸化」、「融解」、その基礎にある「想像力の縮退」という状況を踏まえ、言語生態を保全・育成する力として「生態学的リテラシーの育成」を打ち出している。本章の前半では生態学的リテラシーの定義、後半では第5章への橋渡しとして、生態学的リテラシー育成のための学習のデザインが述べられている。

まず、生態学的リテラシーの定義であるが、リテラシーは、伝統的には読み書き能力を指す識字能力、また最近ではコンピューターリテラシーなど個別の領域における基本的な能力を指す時にも用いられている。しかし、本書ではリテラシーを「生き方のベースとしての基本的な能力」と位置づけ、その上で「生態学的リテラシー」を、①「世界はどんな

っているか」の問いを考えることに関わる生態学的世界認識、②「そのような世界の下でどのように生きるか」に関する生態学的行動基準/生き方、③「その下で人とどのようなつながりを作っていくか」の問いに関わる生態学的人間関係、④「これらの問いの下にある自分、とは何か」に関わる生態学的アイデンティティーの4つが相互につながりながら、らせん的に形成されていくリテラシーと定義づけられる。また、このリテラシーは、「類個のリテラシー」の次元と「宇宙・生命個のリテラシー」の2つの次元を持つとし、前者は個人を起点とし、個人の生き方を人類の一員としての生き方という視点から考え実践する中で形成されるリテラシーであり、後者は「類個のリテラシー」をベースの一端としつつも、自己の自然としての存在のあり方を起点に考えるリテラシーと定義づけられている。

これらの定義を踏まえ、本章後半では生態学的リテラシー育成のための学習のデザインが、主に生態学的世界認識の育成に焦点をあてて述べられている。前述のように生態学的リテラシーを構成する4つの要素は相互につながりを持つ関係であるが、特に生態学的世界認識は生態学的リテラシーの基盤を形成するものとして重要であるとしている。本書では、その学習のデザインが、以下の8つの項に分けて示されている。①自国における状況に関する情報に触れる、②その状況を、自己との関連をたどりながら見ることで状況と自分を「つなぐ」、③それが世界の全体的変動とどうつながっているかを考える、④なぜ世界はそう動くのかを考える、⑤つながりの中にあるグローバリゼーションをたどる、⑥文章化し「情報の能動化による強化」を図る、⑦他領域とのつながりを考える、⑧世界のつながり全体を「私」の位置を見渡す。上記過程の具体的な実践は、次章で紹介される。

3-6 第5章 生態学的リテラシーの育成

第5章では、雇用をめぐり自己を起点とし、自己と世界で起きている様々な出来事との関連を糸口としながら持続可能な生き方を探る生態学的リテラシーの育成方法が、8つのステップで提示されている。そのステップは以下のとおりである。

ステップ⑩ 生態学的リテラシー育成の例

(対話的問題提起型学習、ロールレタリング)

ステップ① 自己を起点として見てみる

ステップ② 人、世界との糸口を手繰る

ステップ③ 人、世界への糸口をたどる

ステップ④ 世界へのつながりを紡ぐ

ステップ⑤ つながりの広がりを紡ぎ足していく

ステップ⑥ グローバリゼーションのつながり全体の広がり「私」位置を見渡してみる

ステップ⑦ 私の「生き方を考える方法論」:「その中でどちらに向かって歩んでいくか」の問いを深める

まず、生態学的リテラシーを育成する過程で中軸となる学習活動、対話的問題提起型学習とロールレタリングの方法が、実際に学習者に書かれたテキストとそれに基づいて行われた対話的問題提起型活動における二人の学習者の対話を中心に紹介されており、自己を起点として世界のコト・モノ・人をおぼえようとはどういうことなのか、提示されている。

8つのステップを通して、自己と世界のつながりの糸口を自己と世界のあり方を行きつ戻りつしながらたどり、紡ぎだす、そして自己とは、自己の幸福とは、未来の自分史としてのライフステージとは、と持続可能な生き方を指向する問いへと段階的に導く。この過程は、第2章で危惧された「想像力の縮退」に働きかけ、世界のコト・モノ・人との広いひろがりを知ることでアイデンティティーを拡大させ、ひいてはグローバル化の下での厳しい状況の中、自己を鍛えつつ打たれ強さを身につけることを可能にし、持続可能な生き方を現実のものとする。

この過程において、世界のコト・モノ・人が雇用をめぐってどのように動いてきた、そして動いているのかが、自己や身近なコト・モノ・人を出発点としながら、政治、経済、環境など世界を構成する様々な分野から、世界への糸口が多方面に広がる形で、漸進的かつ詳細に記述されている。そして、それに対する理解と思考に基づいた29のプロジェクトが紹介されており、学習デザインへの提案が段階的に盛り込まれている。ステップを読み進めていくにつれ、学習者のみでなく教師もまた、グローバル化を生きる一個人としてその状況を、自己を起点として考えさせられ、生態学的な思考と想像力の獲得を促されるのではないだろうか(岡崎2009)。

3-7 おわりに—自然史を負うものとしての問い

以上、本書は生態言語学の中の「人間」と「言語」の間の人間生態系に焦点を当てて、類個のリテラシーの次元の育成について述べてきた。しかし、人間と言語は「自然」の一部として形作られている

ことを忘れてはならない。「自然は、言語を媒介として自己を認識し、自己実現する」(p.250)ため、自然生態系に関する宇宙・生命個体テラシーの育成にあたる場合、先述した「自己を起点とする」ことが「私という自然」を起点とする」ことへ切り替わる。そして、4つの問いを新たな形で問うていく。一人ひとは「(人間生態系に代わって)自然生態系としての世界はどうなっているか」、「その下で自分はいかなる生を形作っていくか」、「自然生態系の世界をなす生命、宇宙とどのようなつながりを持って生きるか」、「そのとき私とは何か」を問うことによって、人間が登場した自然史が形作ってきたコト・モノ・生命・宇宙のつながりを紡ぐという。個々人は「そのような自然を受け継ぎかつそれを超えて、新たなものとして創り出し「受け継ぎ、新たに創り出す」形で生きようとするが故に、自然史は新たなコマを進めていくものとしてある」(p.255)。つまり、人間生態系と自然生態系の成系構造をとらえ返すことは、自然・人間・言語の持続可能な生存の仕方につながる可言えよう。

4. 結語

本書が描き出している雇用・食糧の問題の先行きは決して明るくない。岡崎氏も楽観はしていないなか、あきらめることを棄却し、何とか「凌ぐ」こと、「幸福」を追求することを慎重に模索する。

本書全体を貫くのは、この世に生を受けたことを肯定し、感謝する思いである。それは例えば「数々の奇跡的な重なりで出現した宇宙の中で」「数えきれない偶然の手渡しの連続の末に、生を得て今ここにいる自分が」「世界のコト・モノ・人のつながりと自分とのつながりを手探りにせよとどり、自分を見定めて生きるのが、これだけの膨大な奇跡の蓄積に対するささやかな報恩」(p.60)との世界観や、「「私」の大半を成すのは137億歳の水素が、また超新星由来の酸素が宇宙・生命個を循環」(p.253)したものだとの認識に現れている。

読者は筆者の覚醒した精神の森厳さに導かれな

がら本書を読み進めることになろう。それは、「環境を守ろう」「自然を大切に」といった単なるキャッチコピーには終わらない。長年筑波大学などで教鞭を取ってきた筆者によるメッセージは、これから社会に出て行こうとする若い世代へ向けられた共感と慈愛と激励の瞳である。共にこの時代を歩まんとする意思表示の書なのである。

(本稿は「文献紹介」という投稿枠組みを提案して下さった亡き佐々貴義式先生へ捧げたい)

注

1. 心理的・社会的の相互交渉の関係は「領域」であるかどうかが明記されていないが、4頁の見出しから領域の一つだと筆者らは判断した。
2. 原文では「言語生態・言語生態と環境との間の関係」と「言語生態・言語生態と環境間の関係」(p.5)と書かれているが、理解のために、ここでは括弧に入れて示す。
3. 前述した理論は、「応化理論(Accommodation theory)」、後述したのは、「言語的活力理論(Language vitality theory)」と称される。
4. これは「言語シフト反転理論(Reversing language shift: RLS theory)」と呼ばれている。
5. Dr. Peter Mühlhäusler はオーストラリアの Adelaide 大学で教鞭を取っている。言語保持、言語政策、言語生態学、ビジョン/クレオール言語、異文化コミュニケーションを専門としている。(Academy of the Social Sciences in Australia の Academy Fellows の情報より) (<http://www.assa.edu.au> 2010年1月24日検索)。

参考文献

- 岡崎敏雄、西川寿美(1993)「学習者とのやりとりを通じた教師の成長」『日本語学』12(3), 31-41. 明治書院
- 岡崎暁(2009)「持続可能性日本語教育—生活の質を向上させる言葉の力—」『第三回ルーマニア日本語教師会日本語教育・日本語学シンポジウム論文集』6-41.
- Haugen, E. (1972) The ecology of language, In Dli, Anwar S. (ed.) *The ecology of language: essays by Einar Haugen. Selected and introduced by Anwar S. Dil.* Stanford, California: Stanford University Press 325-339.

すずき(しみず) としこ・ちょう ゆさん・はんばら よしこ・ぼん ひょんひ・ひらの みえこ
／お茶の水女子大学大学院

toshikoshimizu@akane.waseda.jp ・ yusan52@gmail.com ・ yokko1231@yahoo.co.jp
hh9518@yahoo.co.jp ・ hiramie@hotmail.com